▶▷▶常呂図書館★本の案内・紹介情報紙 ★

ゆい・まーる

★VOL１７　令和３年１０月４日発行

絵本の楽しさをおすそ分け

■「ぱったんこ」
松田奈那子／作

子どもを遊びの世界に連れて行く作品。●「はじめてのアート絵本シリーズ」２作目で１作目は**「ふーってして」**。「ぱったんして」は、見開きの左右のページに絵の具を落とし、一度〈ぱったん〉と閉じてページを開くとどうなるだろう？を見せてくれる絵本。その色の変化やできた形のおもしろさに、〈やってみたい！〉と思う子がきっといるはず。●著者の**「でこぼこぬりぬりなにがでる？」「いろがみびりびりぴったんこ」**もどうぞ。●３歳くらいから。

■「あら、そんなの！」
高橋和枝／作

何か心配ごとがあっても〈あら、そんなの！〉が勇気を生み出す魔法の言葉…作者の心やさしいメッセージに包まれたお話。●ネコのプーは、人間のお友だちからパーティに招かれました。でも、パーティは初めてなので、どうしたらいいのか心配です。プーはなかよしのたまみさんに相談すると、〈あら、そんなの！〉と言いつつ、パーティドレスやプレゼントのアドバイス、元気が出る魔法の言葉をプーに教えてくれました。●最初は心配な気持ちでいっぱいのプーが、おしまいには大満足。子どもたちもプーと一緒の気持ちになれます。●〈あら、そんなの！〉に続く言葉にはいろんな気持ちがこもっています…心配しないで、気にしない、だいじょうぶ、いいからいいから、何とかなるさ、いい考えがあるよ etc …。●小さめのサイズで、たまみさんの愛情あふれる気持ちが伝わってくるやわらかい絵がステキです。●３歳後半くらいから。

■「うちのねこ」
高橋和枝／作

表紙をめくると「のらねこだったねこ。あるひ、うちにやってきた。ゆっくりゆっくり うちのねこになるまでのおはなし」と内容を紹介しています。人に慣れない保護猫を飼っていた作者の思い出を作品に仕立てたよう。●春にやってきたネコが、季節とともにしぐさに変化が出て、冬のとても寒い夜にようやく「うちのねこ」になるまでを淡い色づかいと柔らかなタッチの絵で描いています。●表紙と裏表紙とではネコの表情に違いがあり、不安でいっぱいだったネコの心情の変化を映し出しています。最後のページにある作者の短い文がとても印象的。●４歳くらいからおとなにも。

■「コップのすいえい」

二宮由紀子／作　朝倉世界一／絵

テレビで水泳大会を観たコップがタオルと一緒にプールの教室に入り、世界大会をめざします。●シャワー浴びから体操、もぐりの練習などにチャレンジするコップとタオルそれぞれの形や特徴がそのまま得意・不得手になり、真剣だけれどコミカル、それでいてほほえましいお話になっています。●コップとタオルを主人公にする二宮由紀子さんのぶっ飛んだ発想とすっきりした文、そして朝倉世界一さんのほわんとしながらページの隅々まで楽しめる絵…２人がチームを組んだことで生まれるマジックで幸せな気持ちになります。●３歳後半くらいから。

■「ねこのようしょくやさん」

ＫＯＲＩＲＩ／作

作者は、２匹の保護猫（春男とみかん）と暮らしています。●絵本の主人公は２匹のネコで、レストランのシェフ・ハルオと食いしん坊な助手のみかんちゃん。人気メニューはマタタビ入りのハンバーグです。●盛り上がるようなお話の展開はありませんが、太っちょな２匹のネコのちゃめっけたっぷりなしぐさとページのあちこちに仕込んでいる遊び心がいっぱいの絵が読み手の心をくすぐり、なごみます。●ネコ好きな人なら表紙から裏表紙までまるごと楽しめます。●４歳くらいからおとなにも。

■「カラフルなひとりごと」

種村有希子／作

最初のページに、〈あのこも　このこも　こころの　なかで　おしゃべり　しているんです〉と書いています。●子どもたちが感じたり味わったり、体験する小さなできごと…夏の葉っぱのやわらかさ、歯が抜けた瞬間、お風呂で水を飲むおいしさなど、子どものあるあるな気持ちを〈ひとりごと〉の形式で８つのつながっていくお話にしています。●たくさんの子どもたちの表情や家族それぞれの日常がさりげなく描かれ、タイトルそのままのカラフルな愛おしさでいっぱい。●４歳くらいから。おとなが読むと〈そうだった！〉と子ども時代を思い出すかも。

本との出会いを
ボーイズ＆ガールズに

■「さよならのたからばこ」

長崎夏海／作　ミヤハラヨウコ／絵

お別れするときは〈ちゃんとさよならをする！〉…そのための最後の１日を描いた作品、傑作です。●小学校２年生の美波（みなみ）の家族は、明日、南の島から東京へ引っ越しします。お別れ会は済ませたけれど、もう島には戻れないと感じた瞬間に美波の心の中はからっぽになってしまいます。しかも、いつも一緒に遊んでいた洋生（ようせい）とまだお別れしていなかったことに気づきます。●物語の中心は、洋生とたっぷり遊ぶ最後の１日…洋生といると、美波は生まれてから島で過ごした日々の充実した思い出が心の中の宝箱にどんどんたまっていきます。洋生という男の子のすごさとそれを

受け取る美波の感性が抜群！●小学校中学年からおとなにも。

■「カイとティム　影の国のぼうけん」

石井睦美／作　ささめやゆき／絵

シリーズ２作目。１作目で６歳になったカイがひとりで寝ることを両親に宣言した夜に、妖精ティムがやってきて冒険のの旅に出ました。●それから３年後、再びカイの元にティムがやってきます。今度は、影を取られてしまった女の子を救うために、影の国に行き、影を取り返す冒険です。●ティムがカイに寄せる信頼とカイの勇気、そしてカイとティムの会話のやりとりがおもしろく、読み手の子どもたちの好奇心をとらえます。また、カイが心の中で言う文は色づけしているので、子どもたちがカイの気持ちをすんなりと理解できます。恐竜好きのカイならではの困難を乗り切る方法にも共感すると思います。●ベテラン作家２人が描く何ともふしぎな世界は読みやすく、文と絵がピタリと合っています。●小学校低中学年に。

■「ひみつのおばけ一家　１．学校おばけをやっつけろ！」

石崎洋司／作　はんだみちこ／絵

おばけの世界と子どもの世界が混ざり合い、楽しい物語のシリーズが始まりました。●おばけの死神霊子（しにがみ・たまこ）ちゃんが会木（かいき）小学校の３年２組に入ります。人間の子どもたちと友だちになったり、勉強や遊びを頑張ったりしたかったのです。ところが、学校のトイレや図書室にはおばけが…。偶然、霊子が３人並んでトイレに入ったことで、６０年前に決めた〈学校オバケのスイッチ〉が入ってしまい、学校の中はおばけであふれます。●友だちになったかいと君やナナちゃん、リンちゃんたちと一緒におばけたいじを始めますが、学校や地域の歴史を調べたり、身近なことからヒントを得たり…おばけを題材にしながらも、おもしろくてワクワクする学校の物語ができました。２作目が楽しみ。●小学校中学年に。

■「青く塗りつぶせ」

阿部夏丸／作　酒井以／絵

著者が「あとがき」で、子どもの頃に初めてお金をかせいだ思い出を綴り、「人は、〈どこかでだれかが喜んでくれると信じて働くのだ〉」と書いています。●人口わずか５００人の小さな島で暮らす小学校６年生のセイ、タクミ、ミナミたちが同級生のカイトのピンチを救うために今の時代だからできる方法で資金かせぎを考え、実行します。それもこの島ならではの方法で。●島の魅力や漁業の未来にも触れ、子どもたちの〈お仕事〉を通して、失敗を恐れず、タイトルに込めた〈だめなら何回でも青く塗りつぶしてやりなおす〉勇気も伝えています。力が湧いてくる作品。●小学校高学年から中学生に。

■「ベランダに手をふって」

葉山エミ／作　植田たてり／絵

毎日行っている決まりごとを通して少しおとなになっていく少年を描いています。●輝（ひかる）は小学校５年生の男の子。小学校の入学前にお父さんが病気で亡くなったことで、誰かと突然会えなくなってしまうのではという恐怖に襲われます。●そこから生まれた輝とお母さんとの

決まりごと…学校へ行く輝を励ますために、お母さんがベランダから手を振って見送り、それが今も習慣となって続いています。●物語のメインは、去年災害事故でお父さんを亡くした同級生の香帆（かほ）と輝の２人が親しくなり、運動会の二人三脚競走への参加をきっかけにした親子の新しい関係づくり。●香帆にとっての二人三脚競争は香帆とお母さんとの再出発！お父さんの死によって、心が〈悲しい気分に食べられちゃった〉お母さんがようやく元気になった証としてのチャレンジです。輝は香帆の考えや行動を通して、自分はどうなんだろう？と考え始めます。●物語のキーワードとも言える〈二人三脚競走〉が、輝と香帆それぞれの家族を〈支え、助け合う人たちの存在〉となって、大事な役割を果たします。輝と香帆ともに希望と明るさがある終わり方なので、気持ち良さが残ります。●小学校高学年から中学生に。

■「ゴリランとわたし」

フリーダ・ニルソン／作
ながしまひろみ／絵

訳者あとがきの文「まわりにあわせられない〈はみだしもの〉たちの物語」がピッタリの表現。●養護施設で９歳まで過ごしたヨンナは、ゴリラのゴリランに引き取られます。ゴリランは料理や片付けが苦手ですが、読書が大好きで家の中には３千冊以上の古書店で買った本があります。何よりもゴリランは、ヨンナの母親・保護者であり、責任があることをくり返しヨンナに語りかけます。●ヨンナはゴリランとの生活を始めた頃は、ゴリランの外見が恐ろしく逃げることを考えますが、ヨンナの気持ちを第一に考えてくれるゴリランのやさしさを知り、次第に自分の気持ちや考えを言えるように…。●物語は、ゴリランとヨンナのささやかながら心地よい暮らしを邪魔し、ゴリランの土地を手に入れようとする町の実力者・トードと養護施設の教師・ヤードとの戦いが中心。●後半、ゴリランの秘密が明かされ、２人は夢をかなえる〈ボウケン〉の旅に出ます。●普通と普通でないこと、家族のあり方の多様さを含め、ゴリランとヨンナがボウケンの旅で最後に手にする〈幸せ〉に心が温かくなります。●小学校高学年から中高生に。

■「はなの街オペラ」

森川成美／作　坂本ヒメミ／絵

大正時代に花開いた〈浅草オペラ〉に魅入られ、歌とともに生きる道を選んだ少女の物語。●主人公の神谷はなは、１４歳で宇都宮のいなかから東京の井野一郎家にお手伝いとして奉公に。井野は浅草オペラの作曲家、そこではなは井野のオペラを手伝う笛木響之介と運命的な出会いをします。はなは歌が大好きで、一度聴いたメロディはすっと記憶して歌えます。響之介は、はなの才能に気づき、お手伝いの仕事のかたわら発声や歌い方を教え、オペラのレコードを聴かせ、本物に触れさせます。●浅草オペラは、本場イタリアのオペラを日本人に合うように歌詞を日本語に書き替え、時間を短く、舞台設定を日本にしたりと工夫を凝らし、大衆芸能の本場・浅草の劇場で上演し、人々に愛されました。●はなが響之介が出演しているオペラの舞台を訪れた時、主演女優の急病のために急ごしらえの代役を務めることになったことがはなの未来を決定づけます。もう１人、はなにとって大事な鳳馬（ほうま）の言葉、「浅草は夢の街だ。いや、はなの街かもね」はタイトルにもつながり印象的です。●浅草で活躍の場を得たはなですが、大正１２年の関東大震災で浅草が壊滅し、大きな転機を迎えます。美の神ミューズに魅入られたはなの決断は、大きな代償を払いながらも音楽とともに生きる道を選びます。●その心意気は、中高生の心にまっすぐ響きます。